HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | イギリスの対フィンランド宣戦問題（１９４１年）　ー英ソ同盟の最初の試金石としてのー |
| Author(s) | 秋野, 豊; AKINO, Yutaka |
| Citation | 北大法学論集, 34(3-4), 1-25 |
| Issue Date | 1984-03-09 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/16439 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 34(3-4)_p1-25.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

# イギリスの対フィンランド宣戦問題（一九四一年）

## ――英ソ同盟の最初の試金石としての――

秋野豊

一九四一年六月二二日早朝ドイツはソ連攻撃を開始し、ソ連西部国境はただちに独ソ戦の舞台と化した。またフィンランド北部に駐留していたドイツ軍部隊も南下の様相を示し、ソ連北部国境にも脅威が出現しつつあった。迎え撃つ赤軍側は西方のドイツ軍に対して防戦を行ないつつ、フィンランド方面からのレニングラードへの脅威に対しては先制的な行動にでた。これはソ連の対フィンランド攻撃という形をとったが、とくに六月二五日の赤軍のフィンランド領土への空爆は本格的な規模のものであった。一方前年のソ連・フィンランド戦争における失地の回復とソ連ボリシェヴィキ体制の陥落とを期していたフィンランドは、このソ連の行動を好機と捉えただちにソ連に対する宣戦を発した。翌六月二六日のことである。こうしてフィンランドは対ソ戦争に突入したのである。(1)

さてフランスの降伏以来約一年におよぶ単独の対独抗戦を維持してきたイギリスにとって、独ソ戦の勃発は歓迎すべ

きものであった。二二日当日イギリス首相チャーチルはラジオ演説の中で「ナチ世界と戦う者ならびに国家は我々の援助を受ける」との原則を明らかにし、対ソ援助を声明した。同時にチャーチルは「ヒトラーとともに歩む者ならびに国家は我々の敵と見なされる」との原則をも明らかにした。(2) しかしフィンランドが二六日以降「ヒトラーとともに歩」んだにもかかわらず、イギリス政府は同国を「敵と見な」す具体的な行動を採りはしなかった。ソ連政府もまたイギリス政府になんらかの対フィンランド対策を講ずるよう要求しなかった。しかし九月に入りソ連が軍事的苦境に立たされると、ソ連政府はフィンランドの戦線離脱をもたらす効果を期待してイギリスのフィンランドに対する最後通牒の送付を希望するに至る。イギリス政府はこれに対して消極的な対応を続けたが、ソ連政府の度重なる強硬な要求に屈して一二月七日ついに対フィンランド戦争宣言を発する。

振り返って見れば、この問題は三ケ月という比較的短期間にソ連側の意向に沿った形で解決されている。しかしソ連側にとって、「ヒトラーとともに歩む国家」フィンランドに対するイギリス政府の姿勢は、「敵の味方は敵」であるとするチャーチルの第二原則に直接にかかわる問題であった。それが故に、宣戦を巡る英ソ交渉は極めて緊張に満ちていたのである。さらに述べるなら、イギリスの宣戦如何は「敵の敵は味方」であるとする第一原則から導かれたイギリスの対ソ援助方針の真偽を問う一種の試金石であったのである。この意味で、宣戦問題は英米ソの「大同盟（Grand Alliance)」への基礎となった一九四一年後半における英ソ同盟の性格ならびにその後の発展へこの問題がもたらした影響を探る上で重要と思われる。

であるにもかかわらず、イギリスの対フィンランド宣戦をめぐる英ソ関係を中心テーマに定めた論文の類いは管見の限り存在しない。ソ連の史書もこの問題には多くの紙面を割いていず、たとえば『外交史 *История дипломатии*』の第四巻は「イギリスがフィンランド、ハンガリー、ルーマニアに対して戦争宣言を発するにあたり、引き延しを行なっ

たことは留意に値する。ソ連政府がしかるべき申し入れを行なった後の一二月六日になって、イギリス政府はようやくこれらヒトラー・ドイツの同盟国に対して宣戦を行なったのである。」と記述しているのみであり、また『第二次大戦史 *История второй мировой войны*』の第四巻も同様に、次の一パラグラフの記述にとどめているにすぎない。「反ヒトラー同盟に属する国家の重要な義務の一つは、ヒトラー・ドイツの衛星国との関係を絶つことであった。ソ連政府はすでに秋段階にイギリス政府に対して、対ルーマニア・ハンガリー・フィンランド宣戦を行なう必要性を提起した。……ソ連政府のこの立場はイギリスの一部の政治家だけではなく、広汎な英世論からの理解をえた。……」[3]。これら両著はこの問題にかんしてこのように寡黙であるばかりではなく、苦戦中のソ連がイギリス政府に対三ケ国への宣戦を強く要求したこと、またイギリスの宣戦の遅延に対してソ連政府が憤慨し、イギリスの同盟精神に対する不信の念を強めていった事実を明確にしてはいない。

本論文では、英国公文書館（Public Record Office）所蔵の内閣関係文書（CAB）外務省文書（FO）に依拠して、イギリスの対フィンランド宣戦に至るまでの英ソ交渉を、主にイギリス側から辿ることにする。

*　*　*　*

フィンランドの北方からの軍事的圧力は、西方からのドイツ軍の大規模な攻撃に全力をもって防戦しなければならなかったソ連にとって、時の経過とともに由々しいものとなっていった。このためスターリンは八月四日ローズベルトに書簡を送り、その中で一九四〇年にソ連がフィンランドから獲得した一部領土の返還を条件にソ連はフィンランドとの休戦交渉を行なう意思のあることを明らかにし、フィンランドを戦線離脱させるための仲介の労をとるよう合衆国政府

に依頼した。[4] しかし合衆国政府がこのソ連側の依頼を実行に移したのはそれから二週間後のことであった。このことは同政府がソ－フィン間の調停工作に意欲を欠いていたことをまず間接的に示している。さて、その八月一七日国務次官ウェルズ（Summer Welles）は駐米フィンランド大使にソ連側の意向を伝えた。その際ウェルズは合衆国政府が仲介の役割を積極的に果す意思のないことをフィンランド大使に印象づけようと務めている。フィンランド大使が合衆国の役割の性格にかんして説明を求めたのに対して、ウェルズは「合衆国政府はソ連がそのような希望を持っていることを知っている」という回避的言辞をもって返答したのである。[5] このためフィンランド政府は合衆国政府が正式の回答を要求しているとは考えず、加えて彼らがソ連体制の早期陥落を確実視していたこともあって、同政府はこれを放置したまま対ソ戦を継続した。[6]

このように合衆国を仲介しての政治的な働きかけの失敗が明らかとになった八月末から九月初旬にかけて、フィンランド軍の南下は勢いを増し、レニングラードに対するその脅威は高まった。さらにその頃、東部戦線における赤軍の抗戦能力を占うと見なされたキエフ攻防戦は赤軍にきわめて不利な展開をみせていた。

祖国のこのような逆境を遠くイギリスにて座視せざるをえなかったソ連駐英大使マイスキー（Маиский, Иван）は八月の末、独自の判断でイーデンに会談を申し入れ、イギリスは対ソ援助公約を履行していず、このためソ連政府内に対英不信が芽生えつつある旨を英外相に強く訴えた。[7] イーデンはマイスキーの言葉に苦悩の表情を露わにした。さらに数日後には、「赤軍への贈り物」としてハリケーン（Hurricane）戦闘機二百機を供給することをイギリス政府は急遽決定した。[8] ここからマイスキーは、イギリス政府は第二戦線開設に代表される軍事援助行動を実行する意思を有してはいないが、対ソ援助公約の不履行には精神的な負い目を感じており、したがってソ連政府が第二戦線の開設と武器・軍需物資の供給を同時にそして正式に要求するならば、前者を拒否せざるをえないイギリス政府はその代償として後者、

すなわち大規模の援助物資供給に必ずや応ずるとの結論を引きだした。マイスキーはこの結論に基づく報告書をモスクワに送った。(9)

はたして九月四日スターリンのチャーチル宛て書簡と指令とがマイスキーの許に届けられた。その親書の中にはマイスキーの進言通りの二要求が盛り込まれ、さらにそのインパクトを強めるための以下の文章、「これら二種の要求が満されなければ、ソ連はたんに敗北するか、もしくは反ヒトラー主義戦線における積極的軍事行動を通じて連合国側を助ける能力を長期間にわたり喪失することでありましょう」が付け加えられていた。マイスキーはスターリンからの私信を手渡した後、指令に基づき口頭にて第三の要求を行なっている。すなわち、フィンランドが対ソ侵略を中止しない場合、イギリス政府は同国に戦争宣言を発する旨の通知を行ない、これをもってフィンランドの対ソ戦線からの離脱を促すことを求めたのであった。(10)ところでこの要求が口頭でなされた理由は後に明らかにされるように、小国フィンランドの攻撃に苦しめられたソ連がイギリスにこの種の要請を行なったことが漏洩したり、もしくはその証拠が残ることを恐れてのことであった。

さて九月六日チャーチルはスターリン宛ての返書を認め、まず第二戦線の開設は物理的に不可能であるとの見解を示し、次いで武器等の供給についてはスターリンの要求を満たす用意のあることを明らかにした。マイスキーの進言は的をえたものであることが判明した。そしてフィンランド問題についてチャーチルは、「フィンランド軍がソ-フィン旧国境（一九四〇年以前の）を越えて南下した場合、英政府はフィンランドに戦争宣言を発するとの警告を行ないます。また、合衆国政府に対してもこれに沿う形での外交的圧力をフィンランド政府に加えるよう依頼する所存であります。」と返答した。(11)さて、スターリンはこの返書をクリップス（Cripps, Sir Stafford）英駐ソ大使から手渡され一読した後、ただちに宣戦にかんするチャーチルの言葉を「是非とも実行に移すよう希望する」と英大使に表明した。(12)クリップスは

スターリンのこの発言を本省に伝え、これに基づいて本省はただちに「フィンランド、ルーマニア、ハンガリーに対する宣戦問題」と題される覚え書を作成し、閣僚に配布した。外務省はその中で、ソ連側がこの要求を再び強硬な形で行なわない限り対フィンランド宣戦は控えられるべきであるとの見解を示している。そしてその根拠は、(1)宣戦の布告によりフィンランド船舶の利用が不可能となり、その結果イギリスの海上輸送力が削減されること、(2)合衆国の世論は非常に親フィンランド的であり、その反発を招くこと、(3)フィンランドを枢軸陣営に決定的に押しやること、(4)フィンランド国内の親イギリス勢力の立場を掘り崩すこと、の諸点に求められた。[13] 九月一五日の第九三回閣議はこの覚え書をもとに討議を行なった結果、「フィンランドがソ連に対する侵略行為を中止しない場合、イギリスは戦中のみならず戦後の講和時においてもフィンランドを公敵と見なさざるをえなくなろう」との警告をノルウェー政府を仲介してフィンランド政府に伝達するとの決定を下した。[14] ここに一定の対ソ譲歩はなされた。しかし、この警告には「戦争宣言」という直截的な用語は使われていないこと、さらに「ソ－フィン旧国境を越えて」という条件も付けられていないこと、そしてさらにフィンランド側からの回答の期限も賦されていなかったことは留意されなければならない。巧妙な値切りの跡が見受けられるのである。

キエフ陥落がほぼ明らかとなった九月一三日、スターリンは再びチャーチルに宛てて私信を送り、前回チャーチルが実施不可能との見解を明らかにした第二戦線開設の代案として、二五から三〇師団の規模の援軍をソ連領内に派遣するよう要求した。[15] スターリンがはたしてこの要求の現実性を信じていたかいなかは明らかではない。ただチャーチルは前回の書簡の中で、敵占領下の海岸に上陸することの困難性をもって第二戦線開設が不可能であることとの根拠としていただけに、その困難の伴わない今回の援軍派遣要求はチャーチルを苦しい立場に追い込んだ。事実、チャーチルはこの要求に対する明確な返答を回避せざるをえなかった。[16] このような対応がイギリスの対ソ同盟精神に対する疑惑をソ連側に

引き起し、ひいては赤軍の抗戦士気を低下させることになるのではないかと憂慮したイギリス政府は対ソ軍事物資供給協定を締結するための派遣団をモスクワに送り、供給公約を通じて瀕死のソ連に活を入れようと試みる。ところがモスクワにおける英米ソ三国協議の開催された九月末から一〇月初旬の東部戦線はいつの瞬間にもソ連体制の崩壊をもたらす様相を呈していた。このような状況にあってソ連に対する武器供給協定交渉は多分にアカデミックに映った。いや、そのアカデミック性が英米代表団に寛大な供給を公約させた最大の要因であった。大規模の供給を謳う協定の成立はソ連側を精神的に鼓舞し、一時的にソ連の抗戦を強化させる期待が持てただけでなく、最終的にはソ連が協定に基づく供給を受ける以前に軍事的に敗北する可能性が強く存在していたからである。ともあれ、イギリス側代表ビーヴァーブルック（Lord Beaverbrook）供給大臣の努力によって、モスクワ協定は成立し、ソ連側を大いに刺激した。[17] 一方、ソ連側にとって、協定の成立は意義深いものであった。供給協定はソ連が抗戦を継続させる限り、ソ連側が現実的に望むことのできた最大限の武器、物資を供給するよう英米に義務づけたのであり、このことはそれ以後の英との援助要求交渉において武器、物資供給問題にかかずりあうことなく、他の重要な問題に全精力を集中することをソ連側に可能にしたのである。これをイギリス側から見ると、ソ連が抗戦を継続する限りイギリス政府は大規模の武器、物資の供給を余儀なくされただけではなく、ソ連からの新たな種類の要求に遭遇することになるはずであった。はたして、モスクワ交渉が妥結の様相を示した時点で、スターリンは戦中のみならず戦後期をも含む英ソ間の政治条約の締結をビーヴァーブルックに提案した。[18] これは具体的に両国間の戦争目的の調整を意味していた。後に述べるように、対三ケ国戦争宣言と同三ケ国を巡る戦後処理問題は密接に関係していたのである。

モスクワ交渉終了から約二週間を経た一〇月中旬、レニングラードはすでに包囲され、首都モスクワからは肉眼でドイツ軍の進撃が目撃されるまでに到った。一〇月一五日には公官庁関係を中心とする首都半疎開が開始され、ドイツ軍

による防衛網突破に伴い残された市民の間に数度にわたるパニック状態が起るまでに到った。[19] しかし、ドイツのモスクワ攻略までまさに一歩という時点に秋期の長雨が降り始め、道という道は泥沼と化し、ドイツの誇る機甲部隊は一定期間完全に停止させられた。一方この悪天候に乗じた赤軍は一〇月二〇日をさかいに全線で際立った抗戦力を発揮し、独ソ戦の流れに転機の兆しが訪れた。この軍事的転機はソ連の対英外交に微妙な変化を与えることになる。

一〇月一七日マイスキー大使は外務省にイーデンを訪れ、フィンランド、ルーマニア、ハンガリーに対してイギリスは宣戦を発すべきである旨のモロトフ（Молотов, Вячеслав）ソ連外務人民委員のメッセージを伝えた。その際マイスキーはソ連の同盟国イギリスによるこの措置はソ連に対する連帯声明として受け取られるであろうとの意見を表明した。[20] この日のソ連外交の動きは数日後に本格的に開始されることになる対英外交攻勢の序曲であった。軍事展開の変化とともに、宣戦問題は政治的色彩を強めるに到るのである。

イーデンはこのモロトフのメッセージを二〇日の第一〇四回閣議で紹介した上で、「対三ケ国戦争宣言がイギリスの利益を損わせることは明白である。しかしいまや我々はソ連に対する連帯の印しとしてこれを行なうべきであると考える。ただこれまでの経緯から、ことフィンランドにかんしては、合衆国政府との協議・協力が必要であろう。」と主張し、外務省側の方針転換を明らかにした。討議の結果イーデンはこれにかんするメモランダムを作成するよう求められ、決定は次回の閣議に預けられた。[21] ところが翌一〇月二一日マイスキーは再びイーデンを訪れ、宣戦問題が閣議でいかなる決定をみたかを質した。未決定のままである旨の説明をイーデンから受けたソ連大使は、ソ連政府はいまやこれに非常に大きな重要性を賦与していると宣し、次のように続けた。「イギリス政府は広汎な規模における実質的な対ソ援助を今日まで行なっていず、そうである以上せめて政治的な面でソ連政府の要求に最大限応ずることはますますもって重要である。宣戦布告を行なっていただきたい。是非とも」。この発言は外交官として最も緊急な場合にのみ許され

る類いのものであった。イーデン自身この日のマイスキーの行動を「外交交渉の場において可能な最大の圧力」と評している。(22)

この圧力を受けた外務省は二三日の第一〇五回閣議にて討議されるべきメモランダムを作成した。そこにおける外務省の見解は、「宣戦布告に反対するあらゆる議論はこの要求を拒絶し、ソ連政府を失望させるべきではないという一点によっていまや排除される」というものであった。(23) しかしこの見解は同閣議での主流の考えとはならず、結局宣戦かいなかについての最終的な結論はまたしてもみいだされず、ただイギリス政府がとるべき方針にかんする合衆国、英連邦諸国の意見を求めるべきことが決められた。ちなみに、この閣議でイーデンを支持したのはビーヴァーブルックのみであった。ビーヴァーブルックは合衆国政府等に参考意見を求める際、英政府が宣戦に傾いていることを明らかにすべきであると力説したが、チャーチルならびに労働党メンバーのアトリー（Clement Atlee）、ベビン（Arnest Bevin）、グリーンウッド（Arther Greenwood）らはビーヴァーブルックの意見に反対し、彼の意見は受け入れられなかった。(24) イギリス側の「是」の判断を付すことなく、戦争宣言の是非をバランスシート形式で問えば、あらゆる第三者的理性が「非」に回答するのは必至であった。

二七日マイスキーはイーデンを訪れ、イギリス政府の方針決定如何について再度質した。イーデンのまたしても否定的な回答に接したマイスキーは、この問題がソ連政府にとってなぜかくも重要であるかを次のように説明した。「イギリス軍は東部戦線において赤軍と手を携えて戦っていないばかりか、いかなる地点でもドイツ軍と戦闘を行なっていない。ソ連政府はこの事態を国民に説明するすべを知らない。ソ連政府は英ソ間に真の同盟関係が存在していることを国民に示したいと希望しているのであり、それが故に我々はイギリスのソ連への連帯を象徴する対フィンランド戦争宣言を是非とも必要としているのである」。さらにマイスキーは、「枢軸陣営はすでにフィンランド、ルーマニア、ハンガリ

ーを取り込んでいるのであり、イギリスの宣戦はこの事態になんらの変化をもたらさない。」とたたみかけた。[25]このためイーデンは同日の第一〇六回閣議にてこのマイスキー発言を報告し、宣戦の「是」を再び説いた。しかしチャーチルはマイスキーの後半の言葉を捉え、イギリスの戦争宣言はヒトラーを盟主とする一大連合がヨーロッパ大陸に形成されたことを宣伝する演出効果を与えるとの危惧を示し、宣戦に絶対反対の意思表明を行なった。これに対してイーデンは、イギリスはソ連の要求をなんとしても満たすべきであると主張した。しかし結局、閣議は「イギリス政府は宣戦のもたらす効果を著しいマイナスとみなしており、ソ連政府が強い圧力を我々に加えない限りこの問題を再考する用意はない」との見解を外相イーデンがマイスキーに伝えるべきことを決定した。[26]さらに、同閣議は合衆国、英連邦諸国政府に宣戦の是非にかんする質問状の草案を承認し、早速打電がなされた。マイスキーは一〇月の最終日にもイーデンを外務省に訪ね、「フィンランド軍はモスクワ戦線にも参加している」との情報を与え、この情報によってイギリス政府が宣戦布告に踏み切ることを希望する旨語った。[27]マイスキーが意味したことは、フィンランドはこれまで旧領土の回復を戦争目的にソ連を攻撃してきたが、いまやフィンランドは完全にドイツの同盟国となってモスクワを攻略中であり、したがってイギリス政府は「敵の味方は敵」の立場から同国に戦争宣言を行なうべきであるということであった。

さてこの頃、ソ連政府がイギリス政府に対フィンランド宣戦要求をつきつけていることを察知した合衆国政府は、フィンランドのソ連侵略を中止させる方向で独自に動き始める。一〇月二五日の本省からの指令に基づき、ヘルシンキ駐在の合衆国公使はフィンランド大統領リュティ（Risto Ryti）に会見を求め、一〇月二七日にこれが許されるや同公使は八月一七日に合衆国政府が仲介したソ連の講和提案に対してフィンランド側はいまだ公式の回答を行なっていないと大統領に詰め寄り、ソ連侵略を中止しない場合、同国は合衆国との友好関係を失う可能性に直面しようとの示唆を行なった。[28]一〇月二九日イギリス大使ハリファックス（Lord Halifax）はハル国務長官（Cordell Hull）を訪れ、第一〇六

回閣議の決定に基づく打診を行なった。これに対しハルは合衆国政府がイギリス政府の希望する外交的圧力をまさにフィンランドに加えている最中であることを告げた。[29] イギリス政府が戦争宣言を真剣に考慮中であることをこのハリファックスとの会談から認識したハルは翌三〇日合衆国公使に再び打電を行ない、その中で直ちにリュティ大統領への接見を得、新たな圧力を加えるよう指令した。[30] ハルはフィンランドに対しこのような圧力を直接加える一方で、イギリス政府がソ連政府の圧力に屈して時期尚早の宣戦布告を行なわないよう腐心する。ハルは一〇月三一日にハリファックスとの会談を行ない、イギリスの対フィンランド宣戦問題にかんして求められていた合衆国政府の回答を示した。ハルはコミットメントを避けようと努めつつも、宣戦に反対の意向を仄めかした。ハリファックスが本省に宛てた電報は「ハルは明言を控えたものの、私の判断するところではおそらく、合衆国政府は宣戦に特に反対でも賛成でもなく、しかし強いて言うならば宣戦は誤った方策と考えているように受けとれた。」と述べている。[31] ハルはこのように微妙な形でイギリス側の動きを牽制しつつも、フィンランドに対しては積極的な政策をさらに継続する。

一一月一日付けのイギリスの主要各紙は「ニューヨーク発」でソ連がイギリスの対フィンランド、ルーマニア、ハンガリー戦争宣言を要求していることを公表した。[32] またアメリカ人記者テイラー（H. J. Taylor）は一〇月三一日リュティとの単独会見を得たが、その際フィンランド大統領はフィンランドの目的がボリシェビキ体制の破壊にあることを暗に仄めかした。この内容もちょうどこの頃公表された。[33] さらに並の外交圧力では効果が見込めないと判断したハルは一一月三日記者会見を行ない、ソ連側の依頼を受けて合衆国政府は八月にフィンランドに休戦提案を行なった旨を明らかにした。このようにして、小国フィンランドの侵略を阻止するためにソ連側がいかに英米に依存せざるをえなかったかを示す情報が合衆国側から公けのものとされた。このことは宣戦問題をめぐる英ソ関係に暗雲を投げかけることになる。

合衆国、英連邦諸国政府からの参考意見は一一月三日までに回収されたが、前述のように合衆国政府のそれは微妙な形でアドバイスを避けるというものであり、宣戦に肯定的見解を示したオーストラリア政府を例外とする英連邦諸国政府は、イギリス政府は自らの判断に基づいて決定すべしとの見解を寄せた。[34] この結果に勇気づけられたチャーチルは同三日の第一〇八回閣議にて、宣戦の「是」を認める見解が少数であることを楯に強い反対意見を表明し、宣戦が得策ではないことをスターリンに卒直に訴える親書を送りたい旨を提案し、承認された。こうして翌四日に送られたスターリン宛てのメッセージの中でチャーチルは、宣戦布告が連合国側に利益をもたらさないとストレートに述べ、次いで「願わくば、宣戦のもたらす利益に我々が懐疑的である根拠を我々の側に熱意が欠如しているとか同志意識が希薄であるとかうことに求めないでいただきたい。……しかしながらもし貴殿が宣戦を我々になお強く希望する場合、私は喜んでこの問題を再び閣議に諮りましょう。」と述べた。[35] 同日このメッセージをイーデンから見せられたマイスキーは強い反発の姿勢を示し、「もし同志スターリンがこれに対する返書の中で宣戦を強く望んだ場合、イギリスは本当に彼の希望を満たす用意があるのか。」と質した。答えに窮したイーデンはその場で電話機をとりチャーチルにこれを伝えた。チャーチルの返答は「このメッセージは同盟国間のものであり、我々は卒直な意見の交換を望んでいる。考慮の末にスターリンが宣戦はやはり最も重要であるとの結論を下した場合、我々が全力を尽くしてこれを満たすよう努力するのは当然である。問題なのは、他の局面をも考慮に入れた上で、スターリンがいかなる程度の重要性をこれに賦与するかにある。」であった。[36] チャーチルの言葉はある種の譲歩を含んでいた。さらにこの日マイスキーは軍事協力問題についてもイーデンと意見を交換したが、彼の発言はすでにソ連外交に一大変化が生じたことを示していた。マイスキーによれば、ソ連政府がいまや討議を望むのは一九四一年中の対ソ軍事援助ではもはやなく、一九四二年春の攻撃についてなのであった。[37] ソ連外交の変化を示す動きはさらに続いた。赤軍創設記念日の前日の一一月六日にスターリンは演説を行なった

が、それはソ連の単独抗戦能力に対する自信に満ちあふれたものであった。スターリンは第二戦線の開設をイギリス側に要求していることをここで初めて公式に明らかにした。[38] 翌七日モスクワで行なわれた軍隊の記念パレードはいかなる点においても第一級のものであることを伝える情報がロンドンにもたらされた。[39] ソ連の抗戦士気はこれを境いに著しく向上する。

一一月一一日マイスキーは七日付けのスターリンからの親書をチャーチルに手渡した。このメッセージは明らかに以前のものとは調子を異にしていた。それは非常に非友好的なものであり、チャーチルは読了後スターリンが英ソ関係の断絶を望んでいるのかと疑った程であった。さてこの親書の中でスターリンはイギリスの対フィンランド宣戦を改めて「強く希望する」かいなかについては触れることなく、「対フィンランド宣戦問題にかんして、耐え難い事態が生起しています。我々はこの問題を特別の機密チャンネルを通じて貴殿に提起したにもかかわらず、これにかんする全経緯は我々の期待をやぶる形で広く公けのものとなっております。それにとどまらず、イギリス政府は我々の提案に否定的な見解を示しました。なぜこのような事態が引き起こされたのでしょうか。英ソ間に連帯が欠如していることを世界に示すためにでしょうか。」と述べ、イギリス政府に対する強い不満と怒りとを露わにした。またスターリンはこのメッセージの中で、英ソ間で戦争目的の一致がなければ戦中のみならず戦後においても英ソの友好同盟関係は望みえないとの意見を述べている。[40] ここにはイギリスの対ソ同盟精神に対する不信が表明されている。たしかにソ連にとってイギリスの宣戦如何は原則の問題であり、このことはマイスキーらの発言から明らかである。ただここで留意しなければならないのは、スターリンはこの段階で対独抗戦に自信を得ていただけでなく、客観的かいなかを問わず一九四二年中のドイツの敗戦を予測していたことであり、[41] とするならばイギリスの宣戦は三ケ国の対ソ侵略を中止させるという軍事的効果や、英ソ同盟を象徴するという政治的効果を越えた利益、すなわちイギリスの宣戦をもって三ケ国を英ソ共通の敵国に

仕上げ、これら三ケ国にかんするソ連の懲罰的な戦争目的――とくにフィンランド、ルーマニアからの領土獲得――をイギリス政府に承認させること、をもたらすが故にスターリンにとってより重要となっていたと思われる。

さて、スターリンの高飛車なメッセージに対してチャーチルは立腹し、返書を送る意図を失った。そしてその旨がソ連側に通知された。(42) 英ソ関係はここに最悪の段階を迎えた。これ以後イーデン、ビーヴァーブルックは今回示されたソ連の対英不信を緩和する第一の方策として、宣戦布告を実行するよう努力を重ねる。まず一一月一一日の第一一回閣議でイーデンは、ソ連側はイギリスが宣戦を渋る理由をフィンランドと他の二ケ国が資本主義国であるという点に求めていると述べ、このような誤解を解消するために戦争宣言を早急に行なうべきであると主張した。(43) これに対してチャーチルは依然ソ連体制の陥落を信じており、これがために彼の宣戦に対する反対は全く揺らぐことはなかった。その後イーデン、ビーヴァーブルック、マイスキーの三人は英ソ関係の改善をもたらすために非公式の協議を行ない、スターリン側から何らかの和解を求めるメッセージを引きだすよう努力した。しかしその間も、マイスキーは宣戦問題にかんするイギリスの対応はソ連の不信感をさらに強いものにしているとの圧力をイーデンに加え続けた。第一一四回閣議にてイーデンは、イギリスはまずフィンランドに侵略を中止するよう要求し、もし二週間以内に肯定的回答がえられない場合には戦争宣言を行なうとの最後通牒を発すべきであると主張した。しかしイーデンはその場での賛成をえることはできず、決定はまたしても延期された。(44) この時点で外務省はあるプランを作成する。それはイギリスとソ連が共同でフィンランドの独立を保障することを条件に、フィンランドの戦線離脱を実現しようとするものであった。(45) イーデンは一一月二〇日マイスキーにこのプランを伝えた。しかしこれに対するマイスキーの対応は冷淡なものであった。ソ連大使はソ連政府がこれに興味を示すことはまずないであろうとの意見を明らかにした。これは当時ソ連の主眼点がフィンランドの戦線離脱にはなく、前述のように宣戦という法的措置そのものにあったとすれば蓋し当然の反応であった。マイス

キーは宣戦問題がソ連を非常に苛立たせていることをまたしても伝えた。[46] マイスキーの消極的見解を目にしたイーデンはこのプランの非現実性を悟り、これをとり下げた。

イーデン、ビーヴァーブルックが待ったスターリンからの和解的メッセージは二〇日に届けられ、これを境いに英ソ関係は最悪の事態から脱することになる。さてスターリンはその中で前回のメッセージの調子が穏当なものではなかったことを認めた。しかしスターリンは、宣戦要求の全経緯が公表されたことによって彼自身ならびにソ連国民がいかに傷つけられたかを「我国は汚辱を蒙らされ、我同胞の意気は著しく阻喪させられたのである」との言葉をもって説明し、自らの行為の正当性を前面にだした。ただ奇妙なことに今回のメッセージの中にも、スターリンがイギリスの戦争宣言を「強く希望する」かいなかは述べられてはいなかった。[47] さて、チャーチルは二〇日にスターリンへの返書を認める際、イーデンとビーヴァーブルックの意見を求めた。その結果、翌二一日にスターリンに送られたメッセージはついに、スターリンがイギリスの宣戦を「改めて」希望するならイギリス政府は一四日の猶予期間つきの最後通牒をフィンランド政府に発する用意のあることを伝えることになる。[48] チャーチルがこの段階でイーデン、ビーヴァーブルックと妥協した背景として、この書簡の中で彼が英ソの戦争目的を調整させる目的でイーデンを訪ソさせる申し入れを行なったことを見逃すことはできない。英ソ関係改善のために、より端的に言うなら「スターリンの心の中に巣くっている対英不信を和らげるために」[49] イーデンの訪ソはここにおいて不可欠であった。しかし一方チャーチルの後継者を自他ともに認めるイーデンにとって、訪ソ時の交渉の決裂は彼の政治的キャリアを傷つけることになるのは必至であり、したがって訪ソ前に英ソ関係を紛糾させる要素を除去しておくこと、就中、対フィンランド宣戦問題を解決しておくことが必要であった。[50] イーデンとチャーチルとの間で、訪ソ受諾とフィンランドへの最後通牒とが裏取り引きされた可能性は否定できない。翌二四日の第一一六回閣議において、イーデンはフィンランド、ルーマニア、ハンガリーが防共協定に近く

調印するとの情報を提供し、イギリス政府が宣戦をためらう理由はもはや存在しないとの主張を行なった。しかし、二一日のチャーチルの親書に対する返書の中でスターリンが正式に宣戦を希望するまで英政府は行動を控えるべきだとの意見に押し切られ、イーデンの努力はまたしても稔らなかった。(51)

はたして二三日スターリンは返書を送り、その中で正式にイギリスの対フィンランド戦争宣言を要求した。(52) 二五日にこれを受けとったイギリス政府はついにハリファックスに指令を送りその中で、合衆国政府にイギリスの対フィンランド政府への最後通牒の伝達を依頼した。翌二七日朝これに基づきハリファックスはウェルズ次官にイギリス政府の対フィンランド最後通牒を届け、その伝達を依頼した。期限は一二月三日となっていた。(53) これは翌一一月二八日駐フィンランド合衆国公使を通じて、フィンランド政府に伝えられた。(54)

ところがチャーチルはことこの段階に到り、宣戦布告に対する抵抗をさらに示す。まず一一月二七日の第一二〇回閣議にて、チャーチルは戦争宣言のなされるべき日付は一二月三日ではなく五日でなければならないと主張を行なった。(55) 翌一一月二八日チャーチルはイーデンにメモランダムを送り、「貴殿は三ケ国に対する戦争宣言が一二月三日に発されることを当然と考えているように思われる。私としては、フィンランドが我々の最後通牒にどのような対応を示すかが明確になるまでこの措置は留保されるべきと考える。さらに言えば三日は尚早に過ぎる。五日こそが私がスターリンに親書を送った時点から起算して二週間後にあたる。今夜私はマンネルハイム (Mannerheim, Baron Carl Gustaf) に親書を送る。我々は彼がこれに対する返答に要する時間を見る必要がある。宣戦布告という措置は賢明なものではないという私の見解は変っていず、私はいまだにフィンランドは撤兵するのではないかという希望を捨て切ってはいない。」と主張した。(56) そして同夜チャーチルはマンネルハイム・フィンランド軍総指令官に「私は今から起こりうることに対して深い悲しみを抱いております。すなわち、我々は同盟国ソ連への忠誠心から数日中にフィンランドに対して戦争宣言

を行なわねばならないということに対してであります。……フィンランドを友とする我々の多くにとって、フィンランドがあの罪深き敗北国ナチスドイツと同席にて戦争責任を問われることほど悲痛なことはありません。第一次大戦にかんして貴殿と楽しく語り合い、文通したことを思い浮かべましたところ、手遅れにならぬうちに貴殿の考慮を促すための純粋に個人的で私的なメッセージを送らざるをえないという気分になったのであります。」という切々とした書簡を送った。(57)

対フィンランド宣戦布告の最終期限を一二月三日から五日まで引き延ばすことを強く主張したチャーチルの意見を受け入れたイーデンはこの旨の指令をハリファックスに再び送り、一一月二九日フィンランド政府はまたしても合衆国政府を介して、イギリス政府は一二月五日まで戦争宣言を控える用意があるとの意向を伝えられた。(58) 一一月二八日のカドガン（Cadogan, Sir Alexander）外務次官の日記によれば、ビーヴァーブルックは「チャーチルがいまだにソ連体制の陥落を運命視している。」ことをイーデンに語っている。(59) チャーチルの宣戦問題にかんする態度はマンネルハイムに宛てた手紙に示された親フィンランド的姿勢と、彼の六月二二日の対ソ援助声明とは裏腹の消極的な対ソ姿勢との産物であった。

こうしてデッドラインを強引に引き延ばしただけではなく、ついでチャーチルは翌二九日にまたしてもイーデンにメモランダムを送りつけ、対フィンランド宣戦布告をさらに延期しようと努めた。チャーチルは「このような大戦争からフィンランドを離脱させることのできるチャンスがいまだに存在するにもかかわらず、タイムリミットに切迫されてこれを行なうのは実に耐えがたい。御承知のように一一月二一日付けのメッセージの中で私はスターリンに『もしフィンランド政府が向う二週間に依然戦争行為を中止せず、また貴殿が改めてこれを希望されるなら……』と述べている。したがって手順は次のようにならなければならない。すなわち、もし五日までにフィンランド政府から戦線離脱を行なう

旨の回答をえないか、もしくは我々の通牒に対する反発的返答をえた場合に、その時点で我々はスターリンに『貴殿が改めてこれを希望するなら』我々はそれに従って宣戦を発するとの意向を伝えればよいのである。」と主張したのである。[60] この日になってチャーチルは「改めて」という語句に新たな解釈を加え、二五日に届けられたスターリン書簡中の正式の宣戦要求を無視しようとしたのである。

一二月一日に開催された第一二二回閣議の結論によれば、チャーチルは一一月二九日付けのイーデン宛てメモランダムで彼が主張した手順に従って宣戦を行なうことを他の閣僚に呑ませている。[61] すなわちイギリス政府は一二月五日までにフィンランド政府から彼らの最後通牒に対する返答をえることができなかった場合に再びスターリンにメッセージを送り、宣戦要求を「改めて」行なうかいなかを質すことになったのである。これが「改めて」という語句の新たな解釈に基づいていたのは、一一月二四日の第一一六回閣議にてイーデンが三ケ国の防共協定参加の情報をたてに即座の宣戦を主張した際に、他ならぬチャーチルが「二一日付の私の書簡への返書にてスターリンが正式に宣戦を要求するまで我々は待つべきである。」と主張したことを思い起すならば明らかであろう。このような形で閣議決定が行なわれた以上、イーデンがモスクワに到着する一二月初旬の時点に到ってもイギリスの宣戦が行なわれていない可能性は十分にでてきた。このようなイギリス政府の対応がスターリンの対英不信をさらに増大させ、イーデンの訪ソの成功を著しく阻害することはイーデンにとって自明に思われたであろう。さて同日の閣議の最後に、チャーチルは「このような方針に基づいて行動する以外に選択肢をみいだしえないが、依然私はこのような措置が我々の利益はおろかソ連の利益に叶ったものであるとは信じない。」とつけ加えている。[62] イーデンは「チャーチルの独裁者的な振舞い」によって「うんざりさせられた」。[63]

一二月二日、チャーチルはマンネルハイムから次のような返事をえた。「フィンランドが必要としている安全保障を

確保できると判断される地点にまで我軍が前進する以前に現在の軍事作戦を停止するのは不可能であり、貴殿もこれを充分御承知のことと考えております。祖国を守る目的の軍事行動によって我フィンランドが英国との紛争に巻き込まれるのは遺憾であり、またこれによって貴殿が対フィンランド戦争宣言を強いられるならば、私にとってこれほど深い悲しみはありません。しかし、このような苦難の日々に親書をお送り下さった貴殿の御厚意に深く感謝致したく思う次第であります」[64]。この書簡はイギリス政府の最後通牒にフィンランド政府がいかなる回答を与えるかを明確に予示しており、イギリスの宣戦布告は十中八九回避しえないとの判断を形成させた。しかし同時にマンネルハイム書簡はチャーチルの心を強く揺り動かし、心情的には宣戦とは逆の方向へ彼を振り向かせた。このため、フィンランドの戦線離脱が完全に望めないことが明らかである以上、できるだけ早期に宣戦を発してソ連政府の対英不満、不信を和らげるべきであるとのイーデンらの主張にもかかわらず、チャーチルはこれを聞き入れようとはしなかった。だが引き延ばしにも限度があることを認識していたチャーチルは、翌一二日三日開催の第一二三回閣議において次の言葉を記録に残すよう書記官に命じた。「フィンランド、ハンガリー、ルーマニアに対する戦争宣言は決してイギリスの利益にそったものではなく、またソ連に対してもなんらの貢献をなすものではないという見解を私は抱いている。宣戦布告の唯一の正当化は我々がソ連政府を満足させなければならなかったという点に求められるべきである」[65]。チャーチルは後世の歴史家からの批判にそなえ、この決定が不合理なものであったこと、とくに彼個人は最後の最後までこの措置にブレーキをかけようとしたことを記録に留めさせたかったのであろう。極東における戦争の勃発と合衆国の参戦とが確実である旨の観測をえた一二月五日深夜に至り[66]、ついにチャーチルは自らの定めた手順に従うことなく、宣戦布告に同意を与えた[67]。イーデンの秘書ハーヴィ（Harvey, Oliver）によれば、その際もチャーチルはいかにも不承不承の態度を示した[68]。しかし、同夜一一時三〇分、フィンランド政府からの否定的回答がもたらされた[69]。翌六日イギリス政府は同日午前一時にフィン

ランド、ハンガリー、ルーマニアに対する戦争宣言を行なう旨を公けに発表し、さらに同六日ハンガリー、ルーマニアからの否定的回答をえ、(70)ついに一二月七日イギリスの宣戦布告は行なわれた。

＊　＊　＊　＊

イーデンはソ連に向けてイギリスを出発する直前に、一九四一年後半の英ソ関係を緊張に導いた対フィンランド宣戦問題の解決を見た。しかし、宣戦がフィンランドの対ソ侵略を停止させる見込は皆無であり、またソ連に対するイギリスの同盟精神を象徴する戦争宣言がソ連市民や赤軍兵士の抗戦士気を高揚させる役割を期待することもできなかった。イギリス側が、チャーチルの言うように、ただソ連を満足させるために宣戦を行なったにせよ、いまやソ連政府側からの感謝を引きだすことはできなかった。

一二月一六日から五回にわたって開催された英ソのモスクワ会議で、宣戦問題はただ一度だけ触れられた。一七日の第二回会合にて、ソ連の東欧各地における領土要求に即座の承認を与えようとしなかったイーデンに立腹するあまり、スターリンが「あの当時（一九三九年夏から一九四〇年冬にかけて）イギリス政府とフランス政府は、ソ連と戦うフィンランドを援助する計画を練っていたではないか。」と非難し、次いで「ところでイギリスはいまやフィンランドに宣戦を発しはしたが」と自らとりなした。イーデンはすかさず「そうです。我々はあなたがたを満足させるためにこれを行なったのです。」と述べた。しかし、イーデンはスターリンからの感謝を引きだすことはできなかった。スターリンは、「その通りである。そのことは理解している。だが、いまやそのことはどうでもいい。」と答えたのである。(71)まさに対フィンランド宣戦問題をめぐる英ソ交渉は、一定の援助を与えつつもなんらの感謝を引きだすことができなかったばか

りか、ソ連の対英不信と不満とを増大させるのみであった独ソ開戦後半年間における英ソ関係全般を象徴していた。

チャーチルが自らの発言の後世への記録を求めた第一二三回閣議の議事録を目にした歴史家の一人として、数ケ月にわたって宣戦を引き延ばしたチャーチルの行動の評価をここで控えるならば、それは礼を失することになろう。後の歴史の示すように、ソ連は勝利国として第二次大戦の終結を迎えたのであり、ソ連の敗北という誤った予測に基づいて「ヒトラーと歩む者ならびに国家は我々の敵と見なされよう」との「敵の味方は敵」方針の実行を引き延ばしたチャーチルの行動は、「ナチス世界と戦う者ならびに国家は我々の援助を受けよう」との「敵の敵は味方」方針、すなわちイギリスの対ソ同盟精神、に対するソ連側の不信を高め、ひいては以後の英ソ交渉におけるイギリス側の立場を弱める結果をもたらしたのである。チャーチルの行動は「決してイギリスの利益にそったものでは」なかったと言えよう。ただ、彼自身歴史家でもあったチャーチルは自らの行動の歴史評価をすでに下しているように思われる。この時期を扱った彼の『第二次大戦回顧録』の第三巻は自らの発言の記録を求めたあの第一二三回閣議の議事録について沈黙しているのである。

（1）百瀬宏「第二次大戦中のソ連のフィンランド政策——戦後への展望に寄せて——I」、『スラブ研究』二〇巻（一九七五）、九八-九九。
（2）Churchill, Winston, *Second World War*, vol. III, 331-333. *New York Times*, 23/6/41.
（3）*История дипломатии*, том IV, Москва 1975, 188. *История второй мировой войны* том IV, Москва 1974, 218.
（4）Ministry of Foreign Affairs of the U.S.S.R. *Soviet Correspondence Relating to World War II*, vol. II, Salisbury 1978, 11.
（5）Foreign Relations of United States（以下 *FRUS* と略称）, 1941, vol. I, 56.

(6) FO 371/29302, N 6717/201/51.
(7) FO 371/29489, N 4840/78/38.
(8) Churchill, *The Second World War*, vol. III, London 1950, 407–408.
(9) Maisky, Ivan, *Memoirs of a Soviet Ambassador, The War 1939–1943*, London 1967, 188.
(10) FO 371/29490, N 5096/78/38.
(11) Churchill, *Second World War*, vol. III, 408.
(12) FO 371/29490, N 5105/78/38.
(13) CAB 66/18, WP (41) 219, 13/9/41.
(14) CAB 65/19, WM (41) 93, 15/9/41.
(15) FO 371/29490, N 5421/78/38.
(16) FO 371/29490, N 5501/78/38.
(17) CAB 70/3, DO (S) 126, 4/10/41.
(18) CAB 66/19, WP (41) 272, 15/11/41. FO 371/29470, N 6312/3/38.
(19) CAB 65/19, WM (41) 103, 16/10/41.
(20) FO 371/29492, N 6060/3/38.
(21) CAB 65/19, WM (41) 104, 20/10/41.
(22) FO 371/29492, N 6125/3/38.
(23) CAB 66/19, WP (41) 245, 23/10/41.
(24) CAB 65/19, WM (41) 105, 23/10/41.
(25) FO 371/29469, N 6228/3/38.
(26) CAB 65/19, WM (41) 106, 27/10/41.
(27) FO 371/29470, N 6288/3/38.
(28) *FRUS*, 1941, vol. I, 83–84.

(29) *FRUS*, 1941, vol. I, 85.

(30) *FRUS*, 1941, vol. I, 86.

(31) FO 371/29470, N 6385/3/38.

(32) *Daily Mail, Daily Telegraph, Manchester Guardians*, 1/11/41. *London Times*, 3/11/41.

(33) FO 371/29361, N 6490/201/56.

(34) FO 371/29354, N 6369/185/56.

(35) FO 371/29580, N 6373/78/38.

(36) FO 371/29470, N 6374/3/38.

(37) FO 371/29580, N 6373/78/38.

(38) BBK/D 95, 6/11/41, Pika to Beneš. FO 371/29493, N 6468/78/38.

(39) WO 193/694, 7/11/41. FO 371/29580, N 6473/78/38.

(40) FO 371/29581, N 6546/3/38.

(41) FO 371/29475, N 6586/3/38.

(42) FO 371/29475, N 6586/3/38.

(43) CAB 65/24, WM (41) 111, 11/11/41.

(44) Harvey, John (ed.), *The War Diaries of Oliver Harvey 1941-1945*, London 1978, 64.

(45) FO 371/29354, N 6772/185/56. Dilks, David (ed.), *The Diaries of Sir Alexander Cadogan*, London 1971, 413.

(46) FO 371/29354, N 6783/185/56.

(47) FO 371/29477, N 6704/3/38.

(48) FO 371/29472, N 6799/3/38.

(49) CAB 66/20, WP (41) 288, 26/11/41.

(50) Addison, Paul, *The Road to 1945*, London 1977, 200. Harvey, *War Diaries*, 68. Young, Kenneth, *The Diaries of Sir Robert Bruce Lockhart*, vol. III, London 1981, 130. Carlton, David, *Anthony Eden, A Biography*, London 1981, 187.

(51) CAB 65/24, WM (41) 116, 24/11/41.
(52) FO 371/29472, N 6888/3/38.
(53) *FRUS*, 1941, vol. I, 108.
(54) *FRUS*, 1941, vol. I, 109.
(55) CAB 65/24, WM (41) 120, 27/11/41.
(56) Churchill, *Second World War*, vol. III, 473.
(57) Churchill, *Second World War*, vol. III, 474.
(58) *FRUS*, 1941, vol. I, 109n.
(59) Dilks, *Diaries*, 414.
(60) Churchill, *Second World War*, vol. III, 473-74.
(61) CAB 65/24, WM (41) 122, 1/12/41.
(62) CAB 65/24, WM (41) 122, 1/12/41.
(63) Harvey, *War Diaries*, 68.
(64) Churchill, *Second World War*, vol. III, 474.
(65) CAB 65/24, WM (41) 123, 3/12/41.
(66) Douglas, Roy, *New Alliances 1940-41*, London 1982, 109 参照。
(67) Dilks, *Diaries*, 416.
(68) Carlton, *Anthony Eden*, 187.
(69) Kowalski, Włodzimierz, *Wielka Koalicja 1941-1945*, tom I, Warszawa 1973, 107.
(70) FO 371/26620, C 13476/949/21. FO 371/29995, R 10352/80/37. FO 371/29995, R 10510/ 80/37.
(71) CAB 66/20, WP (42) 8.

未公開資料の略号について

(1) 公文書館 (Public Record Office, Surry, England)

| | |
|---|---|
| FO 371 | Foreign Office General Correspondence (political) |
| CAB 65 | WM (War Meeting) minutes. |
| CAB 66 | WP (War Print) memorandum. |
| WO 193 | War Office, Director of Military Operation and Intelligence. |

(2) 上院資料館 (House of Lords Records Office, London)

| | |
|---|---|
| BBK | Beaverbrook paper. |

## ≪Summaries of Contents≫

# British Declaration of War on Finland (1941)

## —— The First Touchstone of Anglo-Soviet Alliance ——

Yutaka AKINO*

On the 22nd of June 1941, the first day of German attack on the Soviet Union, Churchill declared that Great Britain would give all-out assistance to the USSR on the principle that enemy's enemy is ally. In the declaration *he also put forward another principle that enemy's ally is enemy. The* declaration served as a major war propaganda, the content of which, however, did not actually reflect the real British war policy behind it.

The first principle soon led to a sort of alliance between London and Moscow, but Britain's attitude to Russia was not wholehearted. This caused Kremlin to be suspicious of British intention *vis-à-vis* the USSR. In September Stalin requested the British Government to declare war on Finland, which since a few days later German launched their attack on Soviet Russia had become Hitler's co-belligerent in the struggle against the USSR but not against Britain. According to the second principle of Churchill Finland was to be Britain's enemy, consequently she should be declared so in the eyes of Stalin. Meanwhile the British Government did not want to face Finland fully involved in the Axis side by their war declaration on her. Without the USSR; enemy's enemy, Great Britain would have had nothing to do with Finland; enemy's ally. More important, the collapse of their new ally appeared to London very likely to occur at any moment. Therefore the British Government were rather reluctant to meet the Soviet demand for the declaration of war on Finland. This added fuel to Soviet's suspicion of Britain.

Towards the end of 1941 Red Army started their successful counterattack on Nazi-Germany with the help of Generals " Distance " and " Winter " and with a little help from England. Now the British Government had to deal with the Soviet Union, which showed their competence to survive German attack and to appear as a predominant European power after the war. The first thing for London to do was to somehow relieve the Russian

*Assistant, Faculty of Law, Hokkaido University

suspicion and to establish the genuine Anglo-Russian coalition. But Churchill himself blocked the British war declaration on Finland for a certain period time which could have showed their singlemindedness about the alliance with the USSR, if it had been done enough promptly. And when British war was finaly declared on Finland, on the 7th of December, it became too late for Churchill to please his Russian counterpart.

Implementation of the second principle, the war declaration on Finland was the touchstone of how much sincerity was in Churchill's first principle, British alliance policy towards the USSR, especially when Britain was not able to help the USSR, substantially; and the negative result of which lay embedded in Kremlin's memory not only during the war but also after it.